

学び続ける学校

別海町立別海中央中学校 校長室便り

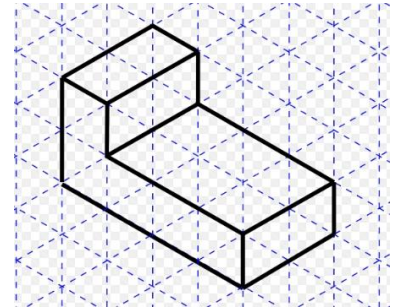
発行 校長 青坂信司

第12号平成27年12月21日(月)

※二学期、明日で終了です。生徒たちは、今学期も大変よく頑張ってくれました。

「できなかったこと」が「できる」喜び ～校内研究会「技術科の授業」から～

- ◆技術科の「等角図」の授業。右の絵のように立体を平面図で描くための方法の一つが等角図である。大人からすると簡単そうに見える。しかし、中学生にとっては、描くことに困難を感じる生徒もいる。



- ◆授業者である教師は、今日の学習で取り組むことをまず示した。それも「等角図をかけるようになるろう」ということを示しただけでなく、「将来、デザイン関係や大工さんになる人には必要なことです」と短い説明を付け足した。今日の授業のねらいを将来の職業と結びつけて「本時のねらい」を生徒たちに示したのである。
- ◆教師は、立体模型の実物を示す。それを等角図にした図面を示す。生徒たちにイメージを持たせた後、生徒たちにスモールステップで描かせていく。始発点を示す。書き始める場所を全員一斉に同じにするためである。始発点から真上に二マス線を描かせる。次は、始発点から右斜め上。三番目は左斜め上。というように全て一斉に生徒たちに描かせていく。教師は、生徒たちの間を歩きながら、つまずいている生徒はいないか、指示したとおりに描けているかを確認しながら、授業を進めていく。
- ◆このようにして、教師は段階を追って丁寧に授業を進め、生徒たち一人残らずプリントに等角図を描くことができた。私の目の前で等角図を描いていた生徒は、完成すると満面の笑みを浮かべた。完成するまで、その生徒は教師の説明をしっかりと聞き、集中して作業に取り組んだ。結果、描けると非常にうれしそうな表情となったのである。生徒の中には、自分の完成した等角図と隣の友達の完成した等角図を見比べあっているものもいる。どの子も完成したことに満足しているのである。
- ◆さて、次に教師は何をしたのか。教師は、一人ひとりの生徒の完成した等角図を見るために、机の間を歩きながら、一人ひとりのプリントに赤ペンで丸を付ける代わりに「大変よくできました」の赤い印を押していった。一人残らず印が押されることとなった。生徒の中にはその赤く押された印を見ながら嬉しそうにしている生徒もいる。中学生といえども、先生が自分の作品を見てくれる。そして、そこに自分の見ている前で印を押してくれるというのはやはりうれしいものなのだと思う。
- ◆その日の二つ目の課題は、前述の等角図を少しだけ難しくしたものだ。ここでは生徒の力だけでやらせるのかなと私は思った。しかし、授業者である教師は、先ほどと同じような授業展開をした。課題の内容が少しだけ難しくなっただけなのである。しかし、「少しだけ難しくなった」というのは「大人の論理」である。生徒によっては、その「少しだけ」が大きな困難となることもある。ここでは生徒を突き放し、生徒自身に考えさせ、自力解決させる方法もあるだろう。しかし、教師はそうはしなかった。ある程度等角図の書き方に慣れた授業の終末の段階で、自力解決の課題を与えたのであった。「スモールステップ」「変化のある繰り返し」「一人ひとりへの丁寧な対応」等、基礎学力習得型の模範となる授業であった。